平成 30 年 1 月 20 日

ところ会員各位

ところ会　2 月行事案内

平成 30 年、第 2 回テーマ
【バスで行く群馬史跡巡り】
（さざえ堂と新田荘を訪ねる）

平成 30 年の春のバス旅行を下記の通り計画し決定しました。

記

■日　　時：平成 30 年 2 月 16 日（金）8 時 00 分集合
■集合場所：西武池袋線武蔵藤沢駅西口
■見学場所及び時間
　武蔵藤沢駅西口 8:05➡圏央道入間 IC…圏央道…関越自動車道…北関東道…（波志江 SA トイレ休憩）…太田桐生 IC➡さざえ堂(曹源寺)➡史跡新田城跡ガイダンス施設➡新田神社・金山城址➡昼食：成花➡生品神社➡矢太神水源➡長楽寺➡東照宮➡新田荘歴史資料館➡本庄児玉 IC…関越自動車道➡圏央道…入間インター➡武蔵藤沢駅到着(18：15 頃)（解散）
■昼食場所：成花（太田市内ケ島町）
■参加費用：4,000 円

■見学場所簡単ガイド
❒：訪問先概要
　所沢には、白旗塚、将軍塚、新田義貞願文、誓の桜、兜掛けの松など新田義貞に関する伝承が数多く存在します。そこで、新田氏の出自である群馬県太田市の新田荘（にったのしょう）という国指定史跡を訪ねます。新田荘は平安時代にできた荘園で、寺社境内・館跡・湧水地など 11 の遺跡から構成される史跡です。
　今回は、新田義貞旗あげの地の生品神社や湧水源等に行きます。一方、徳川家康は新田氏系の得川氏の末裔を称したので、ここには徳川家康を祀る東照宮もあります。
　また、新田荘周辺には「日本三大さざえ堂」の一つと言われる曹源寺さざえ堂や金山城跡も周辺にあり、合わせて訪れたいと思います。

＜さざえ堂：曹源寺＞

祥寿山曹源寺（しょうじゅざんそうげんじ）は曹洞宗の寺院で、寺伝によると新田氏の祖義重が京都から迎えたという養姫である祥寿姫の菩提を弔うため、文治３年(1187)に開基したと伝えられています。

江戸時代に本堂が火災に遭い、その後、観音堂が造られ、観音堂を本堂としています。観音堂はさざえ堂と呼ばれ、江戸時代中期に普及・発展した三十三観音・百観音信仰を背景に、関東・東北地方に限って建造された三匝堂（さんそうどう）のひとつです。外観は重層の二階建に見えますが、内部は三層になっています。堂内には秩父、坂東、西国の観音札所計百ヵ寺の観音像を安置し、右回りに堂内を一方通行で巡拝できることから「さざえ堂」の名があります。

＜史跡金山城跡ガイダンス施設＞

太田市のシンボルで金山を広く伝えること目的に開館した施設。館内には金山城跡についてのデータベースやジオラマ、戦国時代の様子を上映する大スクリーンなどを無料で見学することが出来ます。

❒距離：ガイダンス施設‥約 1.5Km‥史跡金山城跡‥約 0.2Km‥新田神社

＜史跡金山城跡＞

概要：金山城は、戦国時代に造られた城で、金山全体の自然地形を利用して造られた「山城」という種類の城です。山頂を中心として金山全山にその縄張りが及ぶ金山城跡は、昭和９年に国の史跡指定を受けました。

指定区分：国指定史跡

時代：築城‥文明元年(1469)／廃城‥天正 18 年(1590)

歴代城主：新田岩松氏/横瀬・由良氏/小田原北条氏

特徴：標高 239mの金山山頂の実城(みじょう)を中心に、四方に延びる尾根上を造成、曲輪とし、これを堀切・土塁などで固く守った戦国時代の山城です。特筆されるのは、石垣や石敷きが多用されており、戦国時代の関東の山城に本格的な石垣はないとされた城郭史の

定説が金山城跡の発掘調査で覆されました。 主な曲輪群は実城・西城・北城(坂中・北曲輪)・八王子山の砦の 4 箇所ですが、山麓にも、城主や家臣団の館・屋敷があったと考えられ、根小屋(城下)を形成していたと見られます。

＜新田神社：群馬県太田市金山町＞

金山丘陵の頂上、標高約二百三十メートル　金山城本丸跡に新田義貞を祀る新田神社が明治七年に造営されました。神社境内には樹齢四百年以上とされる大欅がそびえたってます。

＜生品神社：新田荘遺跡＞

元弘３年（1333）５月８日、新田義貞が後醍醐天皇の綸旨を受けて、鎌倉幕府を滅ぼすための兵を挙げたところです。「太平記」には「五月八日ノ卯刻ニ、生品明神ノ御前ニテ旗ヲ挙、」（巻第十）と記載されています。神社に参集した軍勢は 150 騎に過ぎませんでしたが、兵を進めるに従い数を増やしていったということです。

生品神社境内は、昭和９年（1934）に「生品神社境内新田義貞挙兵伝説地」として国史跡に指定されました。境内には義貞が旗を挙げたと伝えられる「旗挙塚（はたごつか)」や陣を構えたと伝えられる「床几塚」があり、神社拝殿の前には義貞が軍旗を掲げたと伝えられるクヌギの古木（市重文）が保存されています。

＜矢太神水源：新田荘遺跡＞

太田市の北西部は大間々扇状地に立地していることから、「扇端部」の標高 60m

の地点を中心として多くの湧水が見られます。矢太神水源（やだいじんすいげん）は、これらの中でも最も豊富な水量を誇っています。

この地点には「ニホンカワモズク」という、貴重な紅藻類が生息しています。これはかつてこの地が海であった時代に陸に閉じ込められたものが、次第に環境に適応して現在の姿になったと考えられています。

＜長楽寺：新田荘遺跡＞

世良田山真言院長楽寺は、新田氏の祖新田義重の子、徳川（新田）義季を開基とし、日本臨済宗の祖栄西の高弟栄朝を開山として、承久３年（1221）に創建された「東関最初禅窟（とうかんさいしょぜんくつ）」です。

徳川家康は、天正 18 年（1590）小田原北条氏攻めの功により、関東の地を与えられました。そこで、祖先開基の寺とする長楽寺を、天海大僧正を住職として復興に当たらせ、寺領 100 石を与えました。天海は臨済宗から天台宗に改宗し、境内を整備し、伽藍を修復し、幕府庇護のもと末寺 700 寺有余の大寺院に成長させました。現在、境内には文殊山）の中世石塔群や蓮池、江戸時代の建物である勅使門（県重文）、三仏堂（県重文）、太鼓門（県重文）、開山堂などがあります。

＜東照宮：新田荘遺跡＞

世良田東照宮は長楽寺住職天海大僧正の発願により、日光から長楽寺境内に勧請された神社です。本殿・唐門・拝殿と鉄燈籠は国指定の重要文化財の建造物です。

境内には、長楽寺５世住持月船琛海（げっせんしんかい）の塔頭である普光庵跡があり、月船の遺骨とともに弟子６人の遺骨も葬られた普同塔であることも確認されています。

＜新田荘歴史資料館＞

新田荘歴史資料館は、東毛広域市町村圏振興整備組合から移管を受けた東毛歴史資料館（昭和６０年開館）を名称変更して、平成２１年４月に開館しました。

❒：常設展示

原始・古代：旧石器時代の遺跡は、丘陵部ばかりでなく、沖積地の低台地縁辺部でも確認でき、市域では１万５千年前の旧石器時代後期まで足跡を遡ることができます。

縄文時代の遺跡は、日本最古期の土器文化である爪形文土器を出土した草創期の下宿遺跡にはじまり、前期の間之原遺跡を経て、晩期の大道東遺跡まで、粗密の差はあるものの、遺構が確認できます。

さらに奈良時代には、全国最大規模を誇る史跡「上野国新田郡庁跡」（天良町）、並びに東山道遺構など、古代の郡郷制を知る遺構があります

平安時代の終わり頃になると、新田義重は、浅間山の噴火によって荒廃した「空閑の郷々」と呼ばれた荒蕪地を開発し、久寿元年（1154）頃荘園を興し、保元２年（1157）に花山院藤原忠雅家領新田荘の下司職（げししき）に補任されています。荘域は嘉応２年（1170）には新田郡全域へと拡大し、庶子家の拡大と相俟って勢力を広げております。また、金山東の山田郡域には久寿３年（1156）、園田御厨（そのだのみくりや）が成立し、併せて同じ頃寮米御厨（りょうまいのみくりや）や大蔵保など、伊勢神宮関係の所領が見られ、金山丘陵を介した所領経営の相違が見て取れます。

中世：平安時代の終り頃、源氏の流れをくむ源義国父子は新田郡を中心に開発を進め、子の義重は領地を広げて新田荘を興し、東国武士の礎を築きました。新田氏の一族は上野国を中心に栄え、鎌倉幕府を倒幕し、建武新政を成し遂げた新田義貞のような武将を生みましたが、その後室町・戦国時代には衰退し、戦国末期には上杉・武田・北条氏の勢力が相争う地となっています。

中世を代表する文化財には、複合的な１１カ所の遺跡からなる荘園遺跡としての史跡「新田荘遺跡」があります。

また、中世戦国時代の文化財として史跡「金山城跡」があります。文明元年（1469）、岩松家純により築城された中世の山域で、金山

丘陵のほぼ全域に及び、街場に近い里山としての自然景観と相俟った存在は貴重です。

近世：天正 18 年（1590）徳川家康は関東に入部すると、江戸北辺の要地である館林に徳川四天王の一人榊原康政を配置しますが、市域の多くは館林藩領となっています。

なお当地域は、利根川の水運や、日光例幣使道（木崎宿・太田宿）及び足尾銅山街道沿いにあり、交通も栄えており、江戸や京都などの文化も流入しています。こうしたなか明治維新の先駆者ともいえる勤王思想家、高山彦九郎が輩出されています。

また、徳川家康によって、先祖とした新田義重をまつる大光院（呑龍様）が、慶長 18 年（1613）金山の南麓に建立されます。

近代：明治維新を迎え、市域の大半は岩鼻県に属しました。明治４年（1871）の廃藩置県により、東毛３郡（新田・山田・邑楽）は栃木県に属しましたが、明治９年(1876)に群馬県に属しました。